

山元遺跡は北東から南西にのびる標高およそ40mの丘陵の上に立地し、周辺の田んぼとの高低差は36~37mあります。遺跡南西側からの眺めは良く新潟平野が一望できます（右写真）。

遺跡は居住域と墓域からなり、その間は標高差6~7mの浅い谷によって区画されています。居住域は濠がその周囲をめぐる。およそ30m以上標高差がある高台に作られる集落を「高地性集落」、濠で囲まれた集落を「環濠集落」と呼び、それぞれが防御性を持つ集落と考えられています。どちらも西日本で出現し、弥生時代後期に北陸まで広がったようです。山元遺跡の最盛期でもあるこの時期は、中国の歴史書に書かれている「倭国大乱」という、国内で争いが起きていた頃に該当することから、戦いに備えて防御性を持ったムラが築かれたと考えられます。

山元遺跡で出土する弥生時代後期の土器はほとんどが東北系の土器で占められており、北陸系の土器が少し混んでいるような状況でした。そのため、山元遺跡には東北の土器を使う人々が住んでいたということがわかります。

お墓の中や周辺からはガラス小玉や鉄製品、青銅器が出土しています。これらは、一般のムラでは見つからない大変貴重な遺物で、西の地域との交流・関係があったことを示しています。また、少量ですが続縄文土器という北海道~東北北部で見られる土器も認められます。北とのつながりはお墓の埋葬形態でも垣間見ることができます。

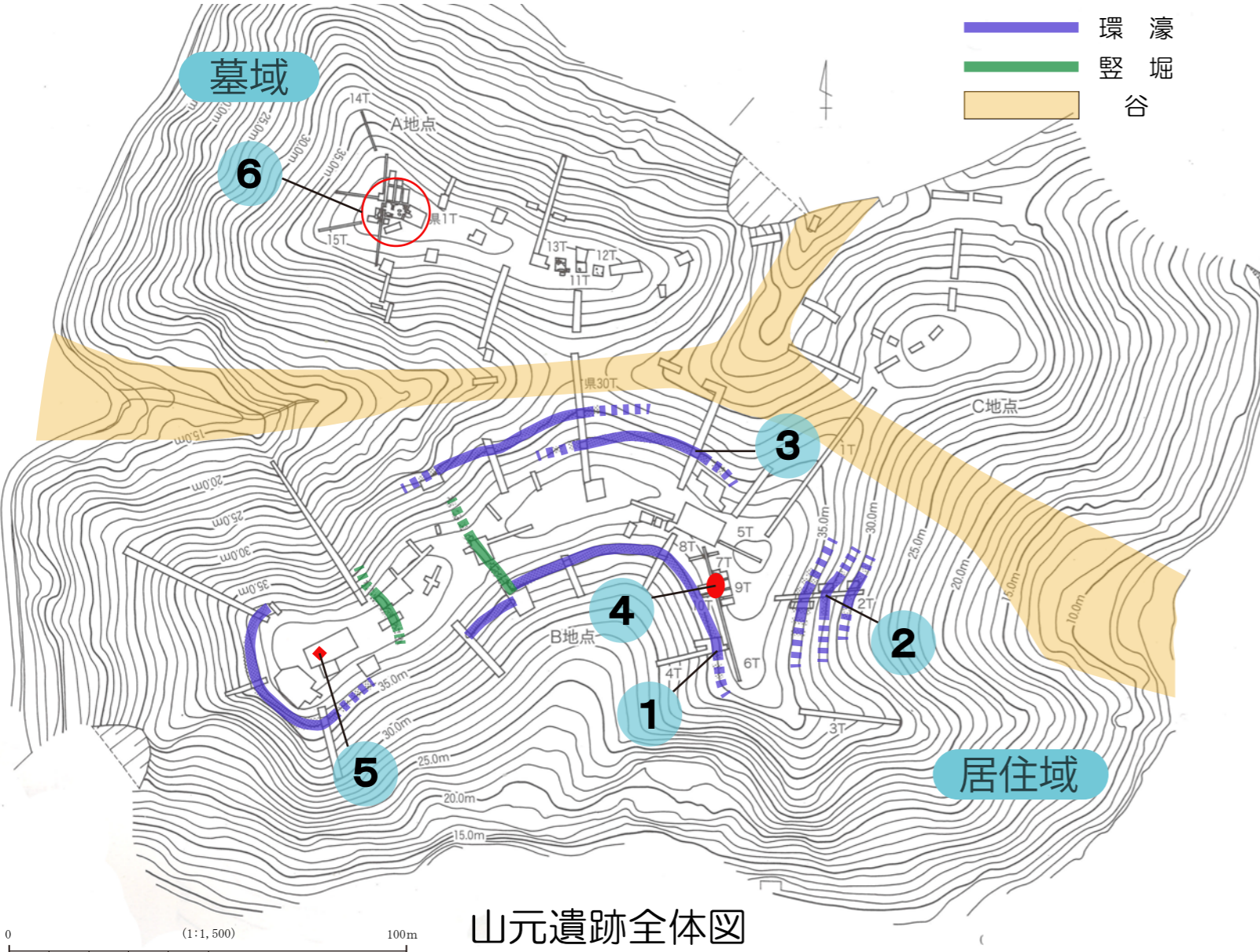
以上のことから、山元遺跡は東北系の土器を使う人々が、西と北の要素を取り入れて暮らしていた集落であるといえます。さらに高地性環濠集落として日本海側最北であることや金属器などの遺物が出土していることを評価すれば、この地域周辺が西の文化を受容する北の境界となるのかもしれません。



環濠

山元遺跡の環濠は、少し小さな規模であることが特徴です。幅が1.4~2m、深さが1m程度の濠のため、防御の面では厳重とはいえません。ただし、特に西側の濠については斜面の角度が急になる「地形変換点」に掘られており、一旦入ってしまうと出づらい構造になっています。西側には越後平野が広がっていますから、そちらの方面を意識したつくりと考えられます。また、環濠の途中には途切れる箇所があるほか、場所によっては2~3条に重なっています。以上の点から山元遺跡の環濠は、多少の防御性は認められそうですが、実用的ではなく、形式的なものだったのかもしれません。

- ①：濠3（南西から）
- ②：濠7（南から）
- ③：濠4西側断面（東から）



山元遺跡全体図



建物跡

山元遺跡では半地下式の住居である竪穴建物1軒と地面に穴を掘り柱を埋め込んだ掘立柱建物1棟が見つっています。

竪穴建物は斜面にとっても近い場所にあり、すぐ西側には環濠が巡っています。残念ながら斜面側半分は消失していましたが、人が暮らしていたため固く締まった床面や、地面に直接火をたいた炉の跡が確認されています。掘立柱建物は丘陵の西端で検出されました。



山元遺跡は一部の調査しか行われていないため、他にも建物跡が地中に埋まっていると考えられます。

- ④(上)：竪穴建物（南から）
- ④(下)：同（東から）、青線が濠
- ⑤：掘立柱建物（東から）

墓域

墓域は谷の北側にあり、居住域とは明確にわかれていました。また、居住域と違い、環濠はありません。墓域の中心部は北西部側で、標高は墓域の中では最高点に位置しています。

山元遺跡からは2種類のお墓が見つかりました。一つは穴を掘って遺体を埋葬する「土坑墓」と呼ばれるもので、7基確認されています。もう一つは穴を掘って土器を埋める「埋設土器」¹⁾で、3か所で見つっています。

1)「埋甕」、「土器棺」とも呼ばれます。

- ⑥：墓域西調査区（東から）

